

知的障がい教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する研究

—生活単元学習の授業づくりを通して—

特別支援教育室 山内 望 川本 孝 山田 亜紀
越智 宣和 玉乃井 美穂
研究協力者 愛媛大学大学院教育学研究科教授
榎木 暢子

1 研究の目的

学習指導要領には、児童生徒の生きる力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが示されている。知的障がいのある児童生徒は、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活場面の中で生かすことが難しい」等の学習上の特性があり、それらを踏まえた上で、これまでの授業実践を基盤にしながら、学びの過程の質的改善を図ることが必要である。

そこで、知的障がい教育における生活単元学習に焦点を当て、資質・能力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の方法を明らかにすることで、特別支援学校等での授業づくりを支援することができると考え、2か年継続の研究として取り組むこととした。

2 研究の内容

(1) 1年次の取組

協力学校である知的障がい特別支援学校（1校）で、知的障がい教育に4年以上携わった経験のある教員（75名）を対象に、アンケート調査を実施した。その分析結果を基に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」（以下「三つの学び」という。）の姿や授業改善のポイント、授業づくりの課題等を明らかにすることができた。

(2) 2年次の取組

1年次の取組を基に「三つの学び」をしている子どもの姿を整理するとともに、授業づくりの考え方（「単元・授業計画の考え方」）をまとめ、協力学校での授業実践を通して、その妥当性を検証した。

ア 「三つの学び」をしている子どもの姿の整理

子どもの姿がイメージできるように、1年次のアンケートの回答や学習指導要領解説総則編等を参考に、授業展開等に沿って、具体的な子どもの姿をまとめた。

イ 「単元・授業計画の考え方」の検討

目指す授業改善のためには、「子どもの思考の流れを重視すること」「『三つの学び』の姿の具現化、焦点化を図ること」「『三つの学び』の姿を引き出す支援の手立てを考えること」が必要だと考え、「単元・授業計画の考え方」をまとめた。

ウ 協力学校での授業実践

○小学部3年 単元「ジュースをかってパーティーをしよう！」（総時間数 13時間）

○中学部3年 単元「暑中見舞いを出そう」（総時間数 9時間）

※授業者：学級担任・副担任 主たる計画者：指導主事 評価者：学級担任・副担任・指導主事

エ 考察

焦点を当てた授業での事例対象児の姿や、単元を通じた学級全体の子どもの姿などの評価から、目指す授業改善の考え方「単元・授業計画の考え方」は、妥当であると考えた。

3 研究のまとめと今後の予定

2か年の取組を通して、知的障がい教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の一つの方法として、「単元・授業計画の考え方」を示すことができた。

今後は、本研究成果を特別支援学校等の授業づくりに生かせるように、授業改善の資料としてまとめ、本センターのホームページに公開する予定である。